



〔Ⅳ〕講演

“教育の原点に立つ 指導と実践”

豊川高等学校長

若林 繁 太

皆さん、今日は。ただ今紹介いただきました若林でございます。今日は皆さんにお会い出来て、いろいろお話出来ることを本当に嬉しいと思います。

いまご紹介にありましたように、この4月に愛知県の豊川高校の校長としてまいりました。2月までは教育評論家として、新聞社では4つの新聞で教育欄を担当し、テレビではNHKの「お母さんの勉強室」でテレビキャスターとして、一週間にいっぺんずつ色々な教育に関するお話をしてました。突然、今度はまた現職に戻るというのですから、私も大変迷いました。教育評論家というのは良いですからねえ。言いたいこと言ってりゃ良いんですから。出来るか出来ないか、そんなこと関係ないんで、それが正しいと思えば言ってりゃ良いんですから。今度はそうはいかないんですね。自分が言ったことを自分が実行しなきゃいかん。現場におりますからね、うかつなこと言えないわけです。

まあそういう中で、なぜ再び現場に戻ったかということなんです。私がこちらに来る時にも、校長時代の仲間が来ましてね、いろいろとアドバイスしてくれました。「今度は、愛知県に行くんだって?」「そうだ」と言ったら、「よしの方が良い」と言うんですね。「愛知県と言うのは、東の千葉に西の愛知と言うぐらいに、管理教育のすごいところだ。そんな所へ行ったら袋叩きになって、半年たって逃げ帰るようになるのが関の山だ。そんなみっともないことするよりも、行かない方が良い。」と言うんですね。そしてある校長さんは、「先生、なぜ愛知へ行くんだ。愛知へ行くメリットが何もないじゃないか。」と言うんですね。私も考えた

んです。ここへ来る時は、どうしようかと思いました。しかし自分で良く考えた結果、テレビに出たり教育評論家としてやってるのは、本当の姿ではないと思うんです。40年近い間、私はやはり教育の実践者だったんです。ですから私の本当の生きる道は、日本の片隅の、どんなちっちゃい所でもいいから、生徒と接触しながらやって行く姿が、私の本当の生きがいだと、そう気が付いたんです。気が付いた以上はですね、もう迷いませんでした。私を求めている学校が、いま愛知県にあるんだ、求めている以上、教育者ならばどこでも行かなくちゃならない、少なくとも私を必要としているとすれば、私はどこでも行きます。それがですね、利害得失は関係ないんだ、名誉とか金なんてそんなこと関係ない。教育者として必要な所なら、どこでも行かなくちゃならない。こう言って私はこっちへ来たわけなんです。

考えてみますと、自分の40年という教育歴は、ただ子供達を追って来たと思うんです。教育ってなんだろうと考え続けてきた人生だったと思うんです。子供達を社会へ出して、生き生きとして子供達が社会を歩いて行く姿、そういうものを私たちはいつも見えています。また夢みてます。子供達が自信を持って人生を歩ける、そういう子供に仕上げるのが教師の務めであろう、それが私の仕事でもある。そう思いながら、だんだんと落ちて行く子供達を見る時にですね、なぜ落とさなきゃならなかったか、そういう反省をこめながらやって参りました。そうやっている内に、何かしら得るものがあるんです。

例えばですね、子供を説得するのにですね、片一方

は説得できる、片一方は説得できないのがあります。それはですね、やはり違いがあるんです。私がここへ来て、ずうっと2ヶ月間、「学校やめたい」と言っていてこずらせている子供がおりました。お父さんもお母さんも一生懸命になって説得している。先生も説得している。ただ聞かない。「もうどうしようもならない、校長先生、なんとかして下さいよ」と言うんで、「そうか、じゃあ、僕とちょっと話させてくれ」、そして15分話しました。そして出て行く時子供は、「先生、明日から一生懸命勉強するから、先生、頼むな」って言って出て行くんですね。たった15分。2ヶ月の間、お父さんお母さん、先生がやってきても駄目なのが、どうして15分でやるのか。先生が私に聞いたんですね、「どうしたんですか?」。で、「じゃあ、あなたが説得したのは、多分こういう事で説得したのではないのか。『高等学校くらい出ないと、社会に出た時良い会社に入れない』、『高等学校くらい出ないと恥ずかしい思いをする』、そういう事を言って説得したんだろ」「そうです。それは普通でしょ。当たり前でしょう。高等学校くらい出ないと、大学も行けないしみつともない。就職する時だって良い会社に入れない。当然でしょ。」って言うんです。だから私はね、「だけでもね、子供もそれは知ってるんだ。だから恐らくそう言われるだろう、そう説得されるだろうということを知ってるんだ。それをその通り言ってるわけだから、答えをちゃんと用意してある。『だけでも僕はイヤです』」っていう訳なんです。質問の内容も知ってますから、答えもちゃんと用意してある。だからいくら言っても駄目なんです。」

僕は15分会ったけれども、そのうち14分が子供に話させている。

「それで?」「君の気持ちは?」「それでどうするの?」、14分間子供と話している。そのうち子供が本当に、どういう事を思っているか。子供がどういう所にまだ未熟な考えを持っているか。そういう事を14分間で知った訳です。そして最後の1分に、「そう。君の思うとおりでいいよ。だけでも、そうやってこうなったらどうする?」。そう言われると、子供は答えを用意していないんですね。突かれていますから、まごつくんです。

「そうら、困るだろう。だから、それはこうやって解決したら良い。いちおう卒業して、君の道はこういう方向のほうが、一番安易に、しかも確実に実行できるよ。その方が良いんじゃないかな。校長先生も応援してやるから、頑張ってみないか。」

「ああ、そうか。それはそうですね。じゃ今度やるから校長先生、あとバックアップしてくれる?」

「きみ、頑張ってくれよ。僕も後押しするからな。」

「うん、そうやる。」

パッと、1分で変わっちゃうんですね。ですから、子供達が答えを用意しているところへ、いくら説明したって、子供は絶対説得されないんです。子供が全く答えを用意していない、その子の恥部と言うものを発見し、それをふっと突くと、子供達は大きく変わって行く。子供達自身で、答えを用意していないんで、あわてるわけです。そして先生の説得にのって行く。こういうことが大切だろう。それはやはり40年間、ただひたすらに子供達と接触しながらやってきた、その結果であろう。

私はね、やはり子供を説得する大きな要素が2つあると思うんです。

一つは、子供達と言うのは純粹ですから大人の心をみんな見抜きます。下手な小細工をしても通らないんです。ですから私はいつも、子供を説得する時には利害関係を全く捨てます。この子のために、何を私はしてやれば良いのだろうか、何をやらなくてはいけないのだろうか、これだけを考えて子供を説得して行きます。そうしますと子供はそれが分かります。「この先生は俺のために一生懸命考えてくれる。」と思うと素直に聞いてくれるわけです。心の中に少しでも違うことを考えると子供はついてきません。ある受持ちの先生が、日頃問題を起こして困っている生徒を呼びましてね、注意したんです。「俺がこんなに君のために心配して、君のために努力してるのに、なぜ君は言うこと聞かないんだ。」こう言って注意したんだそうです。その子が冷たい薄笑いをしながら、答えました。「先生、何をおいしいこと言ってんだ。先生はいつも、こんな子がこのクラスにいなかったら、このクラスはどんなに平和だったろう。なんとかしてこいつを追い出す方法はないだろうか。そう思っているくせに、そんなかっこの良いこと言うんじゃないや」と言ったんですね。その先生は黙ってそこを出てきましてね、職員室へ帰ってきて隣におった仲間の先生に言いました。「ああ、驚いた。俺、実はそう思っていたんだ。ところが生徒にずばっと言われたときには、何とも答えようがなかったよ。で帰って来ちゃったんだけど、あいつ鋭いなあ。」鋭いんじゃないんです。子供っていうのは、先生の心はちゃんと見抜いちゃってんです。ですから先生が心の中から、この子のためにと思ったら子供はちゃんと自然に聞くんですね。

もう一つは愛情です。昔から「教育は愛なり」って言ってます。古い言葉ですけども、しかしその愛情と言うのは決して古くないんですね。今も生き続けてる新しい言葉なんですね。愛情がなくちゃ子供が育てません。その愛情の一番最初と言うのはですね、やはり子供達を好きになることだと思うんですね。嫌いな子は教育できません。好きになることです。いままで私

の手を通ってきた子は一万くらいあります。今考えてみますとね、嫌いな子は私は一人もいませんでした。おそらく私の手を通してきた子供の中で、私を嫌いだという子は一人もいないだろうと自信をもって言えます。私も人間ですから、相性の悪いのはいくらでもありました。なんか見るからに理由はないけれども、なかなか気が合わない、嫌な子だ、そう思う子は沢山ありました。ところがそう思ったときは、向こうもそう思ってるんです。「嫌な先生、なんか分かんないけど、会うのいやだ。」そう思ってんですね。ですから私はそういう子にはむしろ接近して行きました。「君のために何かやることないのかな。何でもあったら言って来い」と力づけました。最初のうちは逃げて歩くんですね。嫌な先生が来たと言うわけですね。ところが何回も何回も小さな事で言っても、「なんか困ったことあるんじゃない」とやって来ますと、だんだんと接近して来ます。そうしていつでも話せるようになります。卒業する頃にはもう、本当に愛情が交流してですね、もう離れられないような愛情を持っているようになります。そのように深い愛情が大切なんです。

ところがこの愛情と言うのは、親の愛情ほど深くはなれません。親と言うのは自分の命も投げ出すような深い愛情を持っています。ですから私たち教師はですね、親の愛情ほど深くはなれません。が、親の愛情とは違う純粋な愛情を投げ込むことが出来ます。

親の愛情はたしかに純粋で、しかも深いんです。だが親は時折、そこへプラス・アルファが付いてしまうんですね。何か自分の利益をふと考えている。「家の子が、名古屋大学に入ったら、俺はまず肩身が広い」とかね。あるいはね「家の子が、医科大学入ったら、まず俺の老後は安心だ」なんてね（笑い）。すると子供はちゃんと見抜いてるんです。ちゃんと目的を達してやったと報酬を要求しますよ。「お父さんの言った通りに医科大学入ってやったから、自動車一台買え」なんて言ってね。自動車一台要求したりします。学校の先生は、大学へ行きたかったら行けるように、あるいは社会へ出たときに困らないように一生懸命になって指導します。しかし報酬は要求しません。その子がどんどん立派になって大金持ちになっても、先生はね、「おまえが大金持ちになったのは俺が日頃教えたからだ。少しよこせ」なんて言いやしないですね。先生は端でこっそりと、「あいつはついにやったか。まああの子だからやれるだろうとは思っておったが、良くやった」と祝杯をあげています。そういうことは生徒も知ってるんですね。知ってますから先生には何の報酬を要求することもあります。そういうことを考えますと、私たちは純粋の愛情を投げ込みながら、子ども達のために全ての利害得失を捨てて説得しますとね、

付いて来るわけです。何か不純なものが少しでもあると、子どもは見抜いてなかなか付いてこない。そういうこともございます。

長野の場合は暴力とか非行とかが盛んなときです、今から14、5年前ですから。暴力や非行がもう盛んにはびこった時代です。あの学校も荒れている最中でした。校長さんがともかく、「俺はもう手に負えない。」と言って、6月ごろ逃げだしちゃったのですから、後を引き継ぐものがいない。そういう時に私が行った訳ですから、非行で荒れた学校の後を継いだ訳です。そして私の著書である『教育は死なず』に載っているような実践を続けて来た訳です。あの本は嘘を書けませんよ。すべてあの本に載っている先生は実物なんです。本当の名前なんです。今その先生方は教壇にちゃんと立ってるんです。そのまま今居続けているんです。その先生方の言ったことや、やったことがそのまま書かれているわけですから。あの先生方もみんな読んでいるわけです。私がみんな一冊ずつ贈呈して、みんな意見を求めたんですから、嘘は書けないんです。ただあそこに出て来る子どもは全部仮名です。それは何故かって言うと、これから50年、60年の長い人生の中で、あの本があるおかげで、少しでも不幸になってはいけない。そういう配慮から全ての子どもの名前は伏せてあります。しかし先生は全部実名ですから、嘘は書けないんです。でよく映画になったりTVになったりしたのを見て、「あの映画のようなすさまじいことは本当にあったんですか？」と聞かれるんです。その時私は答えるんです。「冗談言っちゃいけない。あの映画にあったような事は、“あったんですか”じゃない。あの映画に出て来るようなものは、私たちの実践の中ではほんの易しい一部だ。」と。

例えば、私が続編を映画にするとすれば、これは面白いんですよ。映画にすれば大当たりするだろうと思います。実に先生と生徒のやりあいと言うものはすさまじいものがあります。しかしあれは映画にしたって面白いから見るだけなんです。教育界の参考には一つもならない。何故ならば“ああ、面白かった”で、そんな学校もあるんだとか、ドラマだと思うんです。それで終わってしまうんです。それじゃあの映画の意味がない。ですから全国どの学校でもありそうなことしか撮らないんです。例えば万引とか喧嘩とか、そんなことはどこの学校でもあるんですね。万引とか喧嘩とかどこの学校でも発生することだけを取り上げて、その対応についてやったんです。ですからどこの学校でも参考になるわけですね。「うちでも万引もある喧嘩もある。じゃあの学校はどうやってそれをなおして行ったのだろう。我々の今やっていることとどう違うのだろう。」と参考になるわけです。ところがあの続

編に出るのは、本当にあったことですが、それはもうとても普通ではありません。とにかく私たちは、どんな子でもなおせるということで実験してみようということでやったわけです。いっさいの過去を問わずに受け入れると言うわけですから、少年院からも来るんです。少年鑑別所からも来ているんです。大阪その他のすさまじく荒れたところから、退学になった者を過去を問わずに受け入れたわけです。そして先生方は死ぬ思いでぶつかった訳です。そして失敗した。あれは失敗の事例です。失敗してしまったんです。そのために先生は必死で追ったんです。そのために先生が一人一人と気が狂ってきたんです。先生が気が狂うんですね。2日も3日も徹夜で説得する。家に一週間も帰らずに子供達を説得している。そのうちに先生は思考力がなくなって来るんですね。俺は何を話しているのか、分からなくなって来る。そして医者と呼ばれますと、ほとんどの者が決まった病名なんです。「強度ノイローゼ抑圧症。入院治療を要す。」みんな救急車で病院へ運ばれて行くんです。6人の先生がそうやって精神病院へ入れられています。それほどすさまじいんです。私たちはもうとる手がなかったんです。ですからあの実践は成功事例ではないのです。失敗なんです。

どうしようもなくて私たちは後どうすればいいのか、学校を閉鎖するのかどうかというところまで来たときに、立ち上がったのは生徒だったんです。生徒達が、「こんな事していいのか。あの先生は口先で言っているんじゃない。あの先生は本当に我々の事ばかりしか言ってない。あの先生は今気が狂っているのに、おまえたち今立ち上がらなければ大変なことになるぞ、自分の人生考えて見ろと言いながら救急車で運ばれている。だけでも自分の事なんか一つも言っていない。いつも我々の事を心配して言ってくれる。あの先生をこれ以上苦しめることは出来ない。みんな、非行をやめようじゃないか。」そう言って、生徒達がみんな立ち上がった訳です。そして生徒達自身が非行撲滅運動、暴力追放運動をやり、その中心になったのが大番長だったんですね。ですからすさまじいわけですよ。大番長がまず、先生が倒れて行く姿に感動してですね、「もう俺は散々悪いことをしたけれども、もうやらない。あの先生達を手助けする。暴力や非行を絶対に許さない。」彼はそう叫んで、暴力を追放し非行を追放して行ったんです。彼が先頭にたってそれを止めて行ったんです。そういう様なことで、あれが救われたのですが、考えてみると、先生が必死になって気が狂いながらも子供達の指導に当たった。その指導に感動したと思うのです。とすれば、あのすさまじい子供達を指導するには、もうそれ以外なかったんです。そうでなかったら先生が真剣になって走りながらやってい

た段階で、大抵の子供達は直ってくれるんです。しかし全国から集めたこの子供達は、そんな生温いことでは納得しなかったんです。先生が気が狂って倒れるのを見て、初めて先生を信頼する気になったんです。そして彼らは立ち上がってくれた。失敗はしたけれども、しかし彼らが、どんな子でも、確かに少年院やみんな退学になった子ですから、すさまじい子です。しかしそのすさまじい子でも、私たちが本当に必死になって気が狂いながらもやる、そういう実践を見たときに子供達は、変わってくれる、子供達は初めて教師との信頼感を回復してくれる。そう思うときに、どんな子でも直るんだと、私たちの対応いかんでは、どんな子でも直って行くんだ、あのすさまじい子供でも、直って行ったんだ、そういう事を、今度は教師達が知った訳です。それから後は、その子よりまだまだ、今の子供の方がずっと楽ですから、あの子供から見りゃ、今の子供のほうがまだ良いと思いますと、楽に指導できる。その後の先生の指導力と言うのは高く上がっていったわけです。先生一人一人は気が付かないけれども、実は高い教育技術を持つようになったと思うんですね。ですからそういう様なすさまじい戦いというのは、これは普通の所では簡単にはできません。だから映画化したら面白いかもしれないが、それは参考にならない。ですからそれは映画には取り上げられていないんです。

そういう事を実践しながら本当の教育と言うものを追ってきました。そしてこの豊川高校へ来たんです。豊川高校へ来ましてねえ、この地域の環境を調べました。そしてこの子ども達が非常に、穏やかな真面目な子が多いということ、それからもう一つは、登校拒否とか無気力な子どもも多いと。そういう事を考えますと、落ちこぼしてはならない、それがこの学校の大きな目標になって来ると言うことで、退学ゼロ運動をやった訳です。

そのゼロ運動をやるときに私はまず着任の挨拶をしました。先生方を集めて私は言ったんです。「私は長野からきた新しい校長です。」と言った後、「私は、この学校の単なる校長として来たわけではありません。私はこの学校を日本一の学校にするためにやってきました。そうでなければ私がこの学校にやってきた意味が、メリットが何も有りません。だけど校長一人では何も出来ません。皆さんの協力を求めます。」と言ったんですね。そうしたら聞いている先生方ね、みんないやな顔しましたね。「そんなこと出来るはずねーじゃねーか。また大ばらふく校長だなあ。そんな無理なこと言たって、駄目だ。」という顔でした。私は続けて言ったんです。「日本一の学校になるかならないか、出来るか出来ないか、そんなこと関係ない。なぜ

ならば日本一と決めるのは我々じゃない。地域の人であり、世間が決めるんだ。私たちは日本一の学校を作るために常に努力してれば良いんだ。学校と言うところはとかく、4月に入学させて3月に卒業させている。毎年そうやって続けている。それを繰り返しながら、30年40年経って、定年でやめて行く先生の気持ちをあなた方、分かるか？何か空虚な物足りなさを感じてやめて行く。こんなにつらいことはないんだよ。もうこれまで私はやれることはやってきた。私の全力を子供達に投げ込んで来た。もう私は、これ以上は出来ない。私は自分の全力を教師として投げ込んで来た。と満足してやめて行く教師はいったい何人おるだろう。満足してやめた先生の顔は晴やかで、これ以上出来ないと思って行った先生と言うのは本当に心から晴やかな気持ちになって行く。あなた方にそういう気持ちになってやめて行ってもらいたい。そのためには日本一の学校を常に求めることなんだ。日本一と言うのは大変なことです。入学した子供をただ単に卒業させちゃいけないんだ。入学した子供を大きく伸ばして、そして卒業させて行くんです。今年は10パーセント伸びた。来年は20パーセント伸ばそう、再来年は30パーセント。入ってきた子供を何パーセント伸ばせるかに賭けている。そのためには絶えず研修しなければいけない。そのためにはいつも子供達の実態から目を離してはいけない。そうしながら耐え続けて行くのだ。これはつらいことなんだ。子供の実態から目を離せないということ、常に新しいものを創造して行くということ、新しいものをどんどん開発しながら、子供達にぶつかって行く。一人一人の子供が落ち込んでいたら、その原因を追及して、どう教育したら良いかを創造し模索して行かなければいけない。これは大変な努力だよ。とてもつらい。だがそんなことはよその学校の先生でもみんなやっているんだ。恐らく教師と名のつく人はみんなやっているんだ。だが私たちはそれではいけない。私たちは日本一の学校を目指しているんですから、他の学校の先生の何倍も苦しまなければ日本一にはなれない。他の先生と同じ苦しみをやっているなら日本一なんかなれっこない。他の先生のやっている数倍の苦しさを耐えながら、新しいものをどんどん作り上げて行く。そうしてやって行くときに本当の日本一が出来る。それはいつ出来るか分からない。だがしかしいつもそれを求め続けて行くことなんです。そして出来ないかも知れない。だがしかしそうやって一生を過ぎた時には、もう満足してやめられる。そして恐らくその先生から学んだ子供達は、その先生を永久に忘れないだろう。そういう素晴らしい醍醐味をかかえてやめて行きたいものだ。それが日本一の教育なんだよ。」と言ったら、みんな「ほっ」としてね、ああ良かったと

言う顔をしてました。日本一にならなくて良いんですからね。とにかく日本一になろうと努力さえすれば良いんですから。努力は誰だって出来るんですからね。日本一になれば、と言えどこれは大変ですけど、それはなくなつたて良い、努力を続けろと言うんで、ほつとしたようです。ところがその後で出来たのがこの退学ゼロ運動なんですね。

私は一切の退学を認めません。なぜならば退学させなければいけないような子供は、この世の中いないと言うことを私はこれまでの実践で知っています。どんな子供だって私はちゃんと教育できる。私は今まで長い経験で、それが出来ると言うことを知ってます。もし退学者を出すと言うことは、その子をちゃんとともに教える力が先生になかったことなんです。退学者を出すと言うことは、先生方の力が無いと言うことなんです。子供が悪いんじゃない。先生が悪いんだ。退学者を出すと言うことは、世間に対して教育力がこんなに低いんですよ、証明していることなんです。恥ずかしいことなんだ。例えばタバコを喫って退学させたとしますと、タバコを喫うような子供でさえ指導が出来なかったことになる。退学させると言うことは、先生の指導能力の限界を越えたときに排除する行為なんです。先生が指導できなくなったから排除して、平和を保つ、秩序を保つことなんです。ですから先生が指導できないと言うことは、一人でも退学者を出すと、学校全体が退学させるんですから、その学校全体の教育力と言うのは限度が決ってしまうんです。ですから私たちは、退学を出さないことに誇りを持たなくてはいけません。退学を出さないと言うことは、その学校の先生の力と言うものはどのくらい高いか分からないんです。一人でも出すと、「ああ、その程度だな。それ以上は指導できないんだな、この学校は。」という事になる。まして、大した事でないことで退学させていけば、それほどの力もないことになる。退学者を出すことは、私たち教師の敗北である。決して退学者を出してはならない。子供達が不幸になるということで、退学ゼロ運動を持ち出した訳です。

ところがですね、これを簡単に考えてしまったんですね。先生方の中にも生徒にもおるんですね。退学ゼロ、停学も中止する。停学と言うのは、そのために子供達を良くすると言うわけではないんだ。何のために停学をするんだ。停学になるような子供と言うのは、学習が嫌いなんだ。学習に対してなにか反抗しているわけです。そういう子を出す家庭と言うのは、なにか問題のある家庭です。そこへ、帰れと言って帰したって、家庭も教育力ないんです。学校から、教育から去ってしまうと、いよいよ勉強できなくなる。なにか問題でも起こさないと、間が持たなくなってしまふ。

タバコを喫って3日間の停学になった子供に聞いてみたんです。子供はこう言っていましたよ。「先生、あんなもの俺達、少しも痛くも痒くもない。受持ちの先生が『おまえは3日間の停学にする。』と言うから、『申し訳ありません。』って言うけど、あれは腹の中とは違うんだよ。そうしなきゃ先生がせっかく、厳かに命じているのに、こっちが喜んだような顔しちゃまずいから、悲しそうな顔してるだけだ。」って言うんですね。「先生の顔を立てたんだ。」って言うんです。腹の中じゃ、「3日か。良かった。」、しかしクラスに行くとは違うんです。「おい。特別休暇3日出たぞ。」(笑い)みんなは「やったな。うまくいったな。」って言うんですね。家へ行ったら、テレビ見ながら、せんべいかじっている。お父さん、お母さん、「学校行け」って言わないですよ。だって停学になってるんですから。苦々しく見つめているんですが、「行け」とは言えないですね。3日たちますと、翌日行かなくちゃならない。反省録をもって行かなくちゃならない。煎餅かじりながら、テレビ見ながら、3日たった後、反省録を書きます。

「私はタバコを喫いました。こんな事はいけなくてよく分かりました。これからは先生の言うことを聞いて、一切タバコは喫いません。」・・・「我ながら良い反省文だなあ。じゃあ、一服するか。」なんて、また一服してるんですね(笑い)。そして先生の所へ行って、しおらしくねえ、「先生、もうタバコは喫いません。二度としません。」「うん。分かったようだ。な。今度タバコを喫おうと思ったら、このつらかった3日間をよく思い出して二度とやるんじゃねえぞ。」なんて。生徒はそんなこと思ってやしないですよ。特別休暇が欲しくなったら、先生の前でタバコを喫えば良いと思ってるんですから。全然役に立ってないですよ。ですからそんなことやって教育にならない。だから停学は中止する。そして退学も中止する。退学ということは、子供を大きく曲げて行く行為である。だからそれを中止する。所がね、安易に考えちゃうんですね。先生の方も、「ああそうか。これからは停学はやっちゃいけないんだ。退学もできないんだ。」と、単純にそう考えちゃうんですね。だから退学候補者がいっぱい出ると、クラスが荒れちゃうんです。そうじゃないんですね。実は私の目的は、退学をさせないんじゃないんです。私のは“退学者が出ないような学校”なんです。私は退学させますよ。基準は違うんです。暴力や非行をやって退学させるんじゃないんです。私の方は、この子は退学した方が幸福になるかどうかと言うことが基準になってるんです。この子はむしろ、勉強嫌いで就職を望んでいる、もう勉強に対しては全く意欲がない、この子を無理に学校へ行って

勉強させるより、むしろ望んでいる就職をさせた方がよいだろう、そうした方がむしろこの子にとっては幸福だ、学校に縛り付けておく方が不幸だとなった時は、私は敢然として退学させるんです。その方が子供も幸福ですから。どんな悪いことをしても、退学させたらこの子は不幸になって行く、その可能性が高い、あるいはその可能性が少しでもある、となったら絶対退学はさせない。いわゆる退学の基準は、幸福になれるかなれないかなんです。

しかし幸福になるとして退学させてみたら、後からまた苦しむということもあるんで、そういう先の事は私たちは分かりません。そこでそういう子供に対しては、在籍出向制度と言うのを作ったんですね。席はそのまま、いっぺん社会へ出て働いてごらんさい、退学して社会へ出て、やっぱり会社はいやだとなったら、もう退学になった生徒を受け入れるような学校はどこにもありません。それでは気の毒だ、席のそのまま、いっぺん行かしてみよう、行かしているうちにやっぱり駄目だと帰って来るときには、席はあるんですから、入学試験もない、入学金も要らない、出向している間は授業料も要らない、そして行って、見せてみる、そこに行って本当に喜びながら、真剣になってずうっと働いているなら、その時点で退学させたって遅くないじゃないか。しかし1年くらい経って、やっぱり学校がいいやと戻って来る、その時はそっと迎えてやろう、という在籍出向制度と言うのを設けてやっている。

ですから私たちのやってるのは、退学はないんじゃないんですね。退学者が出ない運動、どういう事かと言うとですね、私たちは登校拒否している子供がおれば、「みんなで一緒に勉強して卒業しようよ」と、みんな誘いに行く友情を持たなければいけない。非行をやっている子には、「非行をやっているのは退学になっちゃうぞ」と、「非行なんかやめろ。君が非行なんかやってると、我々の学校の生徒はみんな非行の生徒だと思われて、みんな迷惑する。やめようじゃないか。」と制止する勇気を持たなければならない。勉強嫌いな子は、みんなで教え合って、みんなで出来るようになるという思いやりや、学校離れな子は友達がいらない、俺が友達になってやろうじゃないか、彼は孤独じゃ可愛そうだ、行って一緒に遊んでやるいたわり、そういうものをしっかり持たせるなら、みんな喜んで学校へ来る。そういう学校と言うのは、クラスは暖かいし楽しいし、明るい学校なんだ。そういう学校からは退学したいと思うような者はいない。「退学の出ない学校」が本当の退学ゼロ運動の真意なんですね。退学させないんじゃない、退学が出ないんです。その運動なんだと言ったときに、先生方はびっくりしました。それは

重いんですね。そういう教育をしなくちゃならないと言うことですから、大変な重さをしょうわけです。「それは出来るかな？」という事で疑問になります。最初は「退学させなきゃいいんだろう」と言うのが、「出来るかな？」と言うことです。「じゃあ、出来るかどうか充分に研究しようじゃないか」と言うことで、4月から6月10日までの間、2ヵ月の間、12回から15回にわたって、深夜にわたって、先生方みんなで研究会を持ちました。退学ゼロ運動の本意、人間教育とはどんな教育なのか、みんなで討論し、全体での討論も真剣にやって、6月10日に、「よし。分かった。」と言うんで、6月11日、退学ゼロ運動の宣言をした訳です。そしてすぐ進めていったんですね。生徒達も最初は分かりませんでした。「停学も退学もない。やりたい放題。悪いことやって処罰されない。」という事で、やり始めたんです。そこで先生方はびしびしと。ところがですね、よく考えてみますと、管理教育（愛知県は管理教育と言われている）と人間教育は、なんだか人間教育の方が、気楽で、好きなことが出来るように感じます。ところが中身は違うんですね。

管理教育と言うのは教育委員会とか学校とか先生方がいろいろ考えて一つの枠を作ります。その枠からはみ出た者を引っ張り出して、どうしてもはみ出すものは退学させる、そして引っ張り出しながら枠の中にいれます。しかしこの枠と言うのは先生やちゃんと知識のある大人が作った物です。そんな滅茶苦茶な物は作っていません。そんなに厳しいものなんかありません。そういう中で出来上がってますから、我々が見ても、そんなに厳しいと思わないんですが、しかしそれでも、そういう中で子供達は暗い顔して、対応します。どんなに楽でも、先生や学校が作った物は、すべてこれを束縛と受け止めるわけです。「俺達は先生から束縛を受けた。束縛を受けてるんだ。」という形で捉えてきます。ですから暗くなる。ところが人間教育と言うのは、厳しいんです。管理教育なんてもんじゃない。もっともっと厳しいんです。だが子供は明るいです。なぜならば人間教育の場合は、子供達が先生と一緒に校則を作るんです。したがってですね、先生と一緒に作りますから、生徒達は自ら作った物だ。なぜ先生が入るかという、先生が出たらめな規則を作ったらいけないから、というわけじゃないんです。生徒に作らすと余りにも厳しいものを作ってしまうんです。ですから先生は、「それは人権を侵すよ。それはひどすぎる。」と、先生はむしろ厳しくないようにするために参加しているようなもんなんですね。子供達に作らせると、とても厳しい規則を作っていきます。そのために先生が緩めるという、そういう立場になっています。そういう形で作って行きますと、自分達で作った規則

ですから、先生も「おまえ達、自分達で作った規則を、自分で破ってどうすんだ。規則のない無秩序の中に君は生きたいのか。」ということでびしびしやります。それに対しては生徒はなんら反発しません。束縛を受けたとしないんですね。なぜならば、「君達が出来なかったら、先生の方でびしびしと束縛をするぞ。校則が多いと言うことは、君達が恥ずかしいことなんだ。違反をしてるということなんだ。」「規則が出来ると言うことは、君達に違反者が沢山おるからだ。だから校則が沢山あるのは君達の恥だ。だから校則が出来ないようにやらなくては行けない。」そういう事をしっかりと植え込んで行くと、彼らは変わるんですね。

長野の場合の例を話すんですね。あその場合も人間教育をして参りました。今、豊川の方も、自動販売機はないんです。ところがどうしてもやってくれ、やってくれと言うんです。「じゃあ、多くの人に迷惑を掛けないと約束できたら、販売機をやろう。」と言ってるんですが、みんな頭をかしげてるんですね。ところが長野の場合は、販売機があるんです。ところがねえ、今の子供と言うのは、飲むと、飲み終わった所でどこでも捨てちゃうのね。ポイッと捨てちゃう。廊下でもグラウンドでも、飲み終わった所にポイッと捨てちゃう。ちゃんとした所へ捨てないんです。いくら言ったって捨てないんですね。先生が注意しても駄目なんで、今度は職員会議でね、制限しよう、例えば“お昼休みしか飲んではいけない”とか、あるいは“塵箱のある所でしか飲んではいけない”とか制限しようと言うんで、先生方は会議を開きました。生徒会に、「今、こういう校則を作るための会議を開いている」と言ったんです。そうしたら生徒会が、翌日（恐らくその日徹夜したんじゃないでしょうかねえ）、学校に、ベニヤ板4枚の大きな看板が4つの所に立ってるんです。なんて書いてあるかと言うと、「撤！」と書いて、「通告。生徒諸君よ、今、学校側は、我々の飲みたい時飲む自由、飲みたい場所で飲む自由を束縛しようとしている。それは我々の仲間の一部の心ないものが、どこでも捨てるということをやったために、学校側はそういう措置を取ろうとしている。この校則を作らせはならない。諸君！飲みたい所で飲める自由、飲みたい時に飲める自由を獲得するためには、バックを捨てるのをよそう！バックは必ずごみ箱へ捨てよう！」一週間後には、どこにも落ちていませんでした。そうしたらその横に小さな看板が立ちました。「最近、校内、グラウンドにはバックが一つも落ちていない。落ちていないのだから、校則を作る必要はないと判断したので、この校則の協議会は取りやめる。学校長」と小さく出たんです。そうしたら、みんな「バンザイ！校則を作らせなかった。我々は自由を守れた。」と喜ん

でるんですね。そこなんですよ。やはり子供達は校則を作らせないと言うことに誇りをもっている。俺達がそれをちゃんと守って行かなくちゃいかんのだ、そうすれば校則はできないんだ、そういうことを子供達にしっかり守らせる。自分で律する事を教えておこなうてはいかん。自分で律することを教えるならばですね、何処へ行っても、決して人にひんしゅくをかうような事はないわけです。そういう事を子供達に一つ一つ教えますと、子供達もその気になって着々と進めているわけです。そういう事で一つずつやって参りました。

子供はみんな私たちにいろんな信号を送ってるんですね。困っている時や、苦しんでる時は、ちゃんと信号送ってるんです。それを私たちはぴしっと受け止めてないと、大変なことになるんですね。

例えばですね、忠生中学校事件と言うのがありましたね。東京の町田市にある学校で、先生が生徒を刺したと言う事件がありました。その時に校長先生が答弁してるんですね。「あれは生徒と先生の問題で、学校の問題ではありません。学校はそういう問題は起きておりません。」と言ったんです。その頃私は丁度新聞の教育欄を担当しておりました。その時に、「しまったあ」と思いました。「大変なこと、言ってくれたな。必ずつかれるぞ」と思いました。その通りです。新聞記者はみんな知ってますからばーっとつかれちゃうんですね。そうしたら日本一荒れている学校と言うことがすぐばれちゃう。そりゃそうなんですよ、子供達の信号、なに一つつかんでないんですよ。子供達が荒れる順番は、ちゃんと決まってるんですよ。それを一つも研究してないんですね。子供が荒れるときは、落書きとかね、ピラを破るとかが一番最初の信号なんですよ。水戸の中学校へ行ったときに、駅から5分の所でしたが、すぐ行って講演に立って、(先生方はその学校の状態を僕に何もおしえてないんですよ)「この学校も最近、荒れてきましたね」と言いましたら、先生が「そうなんですよ。で先生を呼んだんですけども、どうして分かりました？」って言うんですね。駅降りて、階段上がって高架橋を渡ってきますね。ピラが一杯貼ってありますわね。ピラ見ると、女の人にみんな髭がこうして書いてあるんですね。いたずらしてあるんです。あんなことは大人がやりませんからね。「ああ、この頃荒れてきたな」とそう思って言ってみたわけです。そこなんですよ。一番最初は、落書きとか物を破ったりします。それが第一の信号なんです。その時に集めてH R やって、先生の悪口でもなんでも言いたいこと言わすと、収まって来るんですね。それを「しょうがないなあ」と見逃して行きますと、その次は粗暴な行為が始まるんです。バーンとドアを閉め

たり、まあとにかくぎすぎすして、子供達の間でもなんか荒々しい行動になってきます。それは第二の段階です。それまで放ったらかししていると、今度は破壊行動が起きます。ガラスを割る、ドアを蹴破る、そういう行動が起きます。それまで放ったらかししていると、その次来るのが、いじめが出てきます。それから暴力が出てきます。しかも仲間同士の暴力ですね。それを放ったらかししますと、今度は先生に対する暴力が起きます。まあ最初はおとなしい先生、やさしい先生、あるいは女性の先生、それに暴力が加わります。最近は女性も、男より強い人も沢山いますから、必ずしも言えません。生徒が一番恐いのは、自分がこれからやろうとしていることを見抜く先生なんですよ。女の先生が見抜くんですね。ぴしゃっと。だからそれが一番恐いんです。男の先生はだましやすいいんです。みんなころっと騙されちゃうんです。ですから男の先生は恐くないんですね。ところが騙される先生もいなくなっちゃうんです。女の先生みたいに何でも見抜かれたら、子供はたまったもんじゃありません。騙されればなしも困るんです。男の先生、女の先生は適当に配置する必要が有るんですね。それぞれ特色を持っているわけです。

今は柔道5段の先生でも子供は恐がらないですよ。私にも良く言いますよ。「おい、先生、今度来た先生は柔道5段だってな。おい、殴って見ろ、殴って。強いんだろ。殴って見ろ、殴って。殴れないのか。」なんて挑発しますよ。「殴ったら、すぐ教育委員会行っとな、暴力教師と言って、おまえをすぐ首にさせてやるから、殴って見ろ。」先生はぶるぶるしながらねえ、殴れないですよ(笑い)。今の子供は、そういう挑発する悪いのがおるんですよ。そういう所ですから、腕があったって恐がらないんです。恐いのは自分がやる行動を、パッと見抜く先生なんです。これが女の先生に多いので、一番は女の先生なんです。そういう事です。が、実際は暴力の時は暴力にさらされるのは、女の先生が入ります、そしておとなしい先生です。最後の段階が何かと言うと、生徒指導なんて言う、日頃生徒が恐れている先生をやるときには、もうこの学校は荒廃の極に達しているわけです。閉鎖するか、根本的な立て直しをやるか、しか出来ない学校になっているんです。そういう順番がちゃんとある。しかもこの順番は全国みな同じなんです。不思議にみな同じなんです。みなこの順番で行くんです。自分の学校はどのくらい荒れているか、この順番を見ればすぐ分かるんです。

ところがその町田市の忠生中学校は、もう荒廃の一つ手前ですね。おとなしい先生を日頃いじめてる。先生も一人で、他の先生は応援しないいんですから。一人で自分を守らなくちゃいかん。ナイフで守らざるを

得なかった。おとなしい先生ですからね。荒廃の一つ手前。それをねえ、「あれは先生と生徒の問題で、学校は関係ない」なんて言ったらねえ、新聞記者はそんなことみんな知ってますから、「なに言ってるんだ」と言うことです。「えらいこと言ってくれたなあ」と僕も思いました。その通りで、荒廃してどうしようもない学校になってしまったんです。その後に来た校長さんが直したんですけどね、その時の私のエピソードも書いてあります。そういう問題行動について書いてありますけどね。その時、私と会いました。そして言ったんですがね、校長のなり手がないんです。あの荒れた所へ。殺されちゃうから、だからなり手がない。教育長がいくらやっても駄目なんです。とうとう仕様がなから、その時の校長会長に「あんた、行け」って言うわけです。校長会長、あと2年で定年なんですけどね、頭に来ちゃって、「俺がこれだけ教育界に貢献したのに、俺を殺す気か」と言って、教育長とものすごく喧嘩したって言うんですね。そしたらねえ、教育長が「じゃあ、あんた、誰を出せば良いんだ？」って言うわけです。どの先生も「嫌だ」と言って、「どうしても行け」と言うと、翌日辞表が出ると言うんです。そんなこと言うなら、辞表出した方が良くと言うんです。それほどもう恐れられてたんですね。そうになると、「あなたが校長会長なんだから、あなたが行くと言うのは別に問題がない。校長会長なんだから、あんた運が悪かったと思って行きなさい」(笑い)。その時の校長会長だから、仕様がなから、奥さんに「俺やめても、大丈夫か?」と言って、「大丈夫」と言われて、「よし。途中で倒れるかも知れないが行こう」と言って、行ったんです。行ったのが3月31日。

先生達に会って、職員室で「今度、新しく立て直しのためにきました校長です」とやってたんです。みんな聞いているのは職員室ですよ。生徒が5、6人職員室に入ってきたんです。後ろの方の先生を捕まえて、「おめえ。俺の悪口言ったそうだな。落し前つけに来た。おい、なんとかしろ」って言ったんですって。そうしたらね、先生がみんなパッとむこう向いちゃったと言うんです。何故かと言うと、目が合うと「おまえ、いちゃもんつけるのか」と、ガンつけたと言って、今度はその先生がやられちゃうんですね。で、その言われた先生は、廊下に手を着いて「すまなかった。もう2度と言わないから、勘弁してくれ」と頭下げてると言うんです。今度は校長がびっくりしてね、これは聞きしにまさる凄い所だとゾォーとしたと言うんですね。先生がみんなむこう向いて、助けようとしません。こんな事では駄目だと言うんで、翌日私の書いた『教育は死なず』を10冊か買って来てね、配ったと言うんですね。「読んで見ろ。高等学校で、退学を捨

てて、中学と同じように真剣にやっている学校もあるではないか。おまえ達が、何で出来ないか」と読ましたと言うんです。そうしたらパーッと雰囲気が変わったと言うんですね。一週間後には、異装をしているのを、「おまえは、それは服装違反ではないか。やめろ」と言ったら、その生徒が、「なんだ。今までの校長の時は一つも言わないで、急に校長変わったら言い出すと言うのは、おまえ、校長の犬か」、こう言ったって言うんですね。そうしたらこの先生はね、「おう、おまえが犬と言うのなら、犬でも良い。俺はねえ、正すことを忘れてたんだ。俺が間違ってた。これからはびしびしやるぞ。」と言ったと言うんです。そうしたらじっと見ていた生徒が、「ああ、これから先生本気になってやる」と思ったんです。今までの事を、生徒に聞いてみますと、一番便りにならないのが先生、頼りになるのは番長なんです。番長に付いている方が身の安全なんです。先生に付いたって危なくて、やられちゃう。先生の言うことは聞かないんです。番長の言うことは聞いてたんです。今度は本気になって、先生が番長と闘い始めたと言うんで、生徒がパーッと先生についちゃった。そうしたら番長が浮き上がっちゃったんですね。それで番長は仕様がないうってんで、もう白旗上げちゃったんです。それで先生の言うことを聞く。あの学校は今模範校になっているんですよ。素晴らしい学校なんです。荒れた学校と言うのは、その次はものすごく素晴らしく実践が行き届いて、先生方の力も付いて立派になってるんですね。

立派に立ち直った番長が、卒業して行くときに私にいろいろ教えてくれました。「先生。先生の中になあ、殴られやすい先生と殴られにくい先生がおるんだぜ。」と言うんです。「へーっ、そんなのあるの?」と聞いてみたんです。「殴られやすいのってどんなんだ?」って聞くと、「殴るつもりはないんだけど、脅かしてやろうと思ってな。“先生なあ、あんまり大きな顔してるとただじゃおかねえぞ”って言うよね、新任の先生なんてのはね、震えあがっちゃう。殴られるといけないから後ずさりする。間合いが離れるので、空振りしないように間合いをつめようとする、また後ずさりする。こうなって来ると、殴るつもりはなかったのに、殴りたくなって来る」って言うんです。「ああ、そうか。じゃあ、殴りにくい先生と言うのはどんなんだ?」と聞きますと、前に来る先生だって言うんですね。「おっ、おまえやるの?やってみろ、やってみろ」と前に来ると、間合いが違うんで、生徒の方が後ろに行ってしまう。先生が「やらないのかよう」と、また前に出て来ると、そうやっている内に、殴るつもりだったのが、「はてな?この先生より俺の方が強いと思ったんだが、実はこの先生俺よりもっと強い。力を隠

してるんじゃないか？俺に殴らせておいて、後に何か作戦があるんじゃないか？」と思うと、殴れなくなっちゃうと言うんですね。「おれ、殴るなんて言いやしねえよ」って消えてしまう。「だからね、先生、逃げちゃだめだよ。逃げちゃやられるよ。」「ああ、そうか。良いこと聞いた。」その後、私にも2回、そういうチャンスがありましたね。生徒が荒れてる時に、私が飛んで行きましたらね、「おまえがやったのか」と言ったら、「おまえ」と言うのが気に食わないらしいですね、子供達にとって。「おまえとはなんだーっ！」とげんこつが目の前に来たから、「逃げたらやられるな」と思い出して、「お、君は殴って満足するのか？殴って見ろ。」と前へ進んだんです。そうしたらね、じーっと後ろにさがりましたね。「やってみろ。俺はおまえをぶん殴るようなことはしないから。殴りたかったら殴って見ろ。」とそのまま前に進むと、また後ろへさがる。「俺は殴るなんて言いやしないじゃねえか」なんてそのまま終わってしまいましたね。そういうことが2回ありました。ですから逃げたらやられる。前に進んだら生徒は殴れない。番長が教えてくれたんですから、間違いない。そういう事があったら、逃げちゃあ駄目ですね。前に進んだら良い。そういう事も知っておった方がよいですね。これは例外もあります

からね（笑い）。まあ、その時は運が悪かったと諦めてもらうんですね（笑い）。確率は8割ですけど、生徒からかなり沢山の事を学べると思いますね。

学びながら、生徒達を立て直す方法を私たちはしっかりと創造して行く。これがこれからの教師の大切な仕事ではないかと思います。そういう事を絶えず追って行きますと、私たちは忙しいです。忙しいけれど、それを追って行く中で、私たちの大きな力になって行きます。それは必ず先生方の自分の人生を素晴らしい人生、醍醐味のある人生に持って行くことなんです。ただ慢然として生きているよりは、常に何かを追って生きている方が、私たちは「やることをやった」という醍醐味を覚えてきます。そしてそれによって子どもが変わってきた時には、やはり私たちは教師になって良かったという気持ちになります。そうなった時には、その先生の人生は、本当に満ち足りた素晴らしい人生であろうと思います。そのような人生を過ごしていただくようお願いしまして、今日のお話を終わりたいと思います。まだまだお話したいことは沢山あるのですが、時間がございませんので、これで終わりにいたします。長い間の御静聴ありがとうございます。

（拍手）

（文責 研究部。一部省略しました。）